

# 2024 年度 個人研究実績・成果報告書

2025 年 3 月 6 日

|            |                                     |               |      |                     |       |
|------------|-------------------------------------|---------------|------|---------------------|-------|
| 所属         | 商経学部                                | 職名            | 准教授  | 氏 名                 | 大塚 茂晃 |
| 研究課題       | 公会計制度改革における市場規律付け機能について・地方下水道事業について |               |      |                     |       |
| 研究キーワード    | 公会計                                 | 当年度計画に対する達成度  |      | 4.当初の計画どおり研究が進まなかった |       |
| 関連するSDGs項目 | 4. 質の高い教育をみんなに                      | 8. 働きがいも経済成長も | 該当なし |                     | 該当なし  |

## 1. 研究成果の概要

学部再編を機に、商経学部が行ってきたアクティブラーニングのふりかえりを行うことにした。そのためにいわゆるアクティブラーニングとは何なのかといったアクティブラーニングについて先行研究のレビューを中心にを行い、これを千葉商大論叢にまとめた。

まず、アクティブラーニングとは何かについて、先行研究を中心にふりかえった。いわゆる PBL や課題解決学習の内容について触れた上で、アクティブラーニングはこれ以外のものも含めた幅広い概念であることを明らかにした。その上で、本学の商経学部がなぜこのような PBL のようなアクティブラーニングを導入するに至ったのか、その背景について記述した。また、その運営はどのようなものだったのかについて述べた。そして、当時のアクティブラーニングについての問題点を当時の資料などから明らかにした。

そして、商経学部におけるアクティブラーニングとする産学連携委員会が行ってきた活動について、千葉商大論叢に連載を続けた。具体的には、2015 年度から 2019 年度（コロナ危機前まで）を、千葉商大論叢において、連載というかたちで、記述していった。2015 年度は四角いメロンパンといった商品開発、2016 年度もメロンデニッシュの商品開発や SANUS チョコレートの商品開発、2017 年度は CSC 株式会社の運営や地域活動などについて詳細に記述した。また、2018 年度はビジネスコンテスト・商店街活性化プロジェクトなど、新規のプロジェクトをスタートさせた。またインゼミ大会もこれを機にはじめた。2019 年度は 2018 年度の内容を引き継ぎつつも、インゼミ大会は学部全体のプログラムとするようにした。

これらの振り返りからえられた知見は、いくつかあるが、そのいくつかをあげると以下である。1 つは、アクティブラーニングというのは学生の主体的な学びであり、特に商経学部で行われた 2017 年度までの多くの活動はそうはなっていなかった。2 つ目に、これらのプログラムには学生のレベルに合わせる必要性をみた。たとえば、ヒアリング調査を前提としたプログラムにも関わらず、それが難しい学生が参加したいことが難しくさせた。また、CSC 株式会社という会社を設立したが、それは学生にはとても扱えるものではなかった。3 つ目に広報のために活動をするという本末転倒なプログラムは無駄でしかなかった。4 つ目にこれらはすべて課外活動として行われているために、教員の手当てや、その活動の数などは、十分に検討する必要があることを示した。5 つ目に高大連携協定や産学連携協定が、商経学部長の署名捺印で行われたことを指摘した上で、これらの必要性について議論した。

そして、これらの活動が行われた背景について、当時の状況や現況から、記述的な分析を行った。すなわち、入学者が学則定員割れを起こしたことや、学部再編の経営判断が影響していることを明らかにした。

これらの商経学部でのものの研究にくわえて、学長プロジェクト（プロジェクト 3）のワインプロジェクト内のビールプロジェクトについて、これらをまとめて欲しいということであったので、これらについて執筆をさせていただき、学長事務室に投稿をさせていただいた。ビールプロジェクトにおいてのこれまでの学生の活動をふりかえるとともに、このような活動への所感を記した。そこから得られたものとして、商経学部の産学連携プログラムと同様に、やはりプロジェクト学習とはどういうものなのかをしっかりと考えた上で実施すべ

きで、ただ学生が何か関わればよいという考え方は、まちがっているといえよう。学生が何かをすることがアクティブラーニングとなっているのかを常に確認しながら実施すべきであると同時に、その終わり方もしっかりと検討した上でやりはじめるべきではないかとし、このプロジェクトの記述をまとめた。

一方で、当初計画していた公会計制度導入による地方債の影響をみようとした分析は、上記のことに多くのエンフォースメントを割いたために、ほとんど、何もできなかった。この点は、次年度の課題としたい。

## 2. 著書・論文・学会発表等

### 【論文（査読あり）】

なし

### 【著書・論文（査読なし）】

「商経学部におけるアクティブラーニング(2)」大塚茂晃、2024、千葉商大論叢、第 62 巻 第 1 号

「商経学部におけるアクティブラーニング(3)」大塚茂晃、2024、千葉商大論叢、第 62 巻 第 2 号

「商経学部におけるアクティブラーニング(4)」大塚茂晃、2024、千葉商大論叢、第 62 巻 第 3 号

### 【学会発表等】

11 月 29 日 パーソナルファイナンス学会 全国大会 報告

「事業者向け貸金業者の昨今の動向～貸金業協会アンケート調査を用いて」

## 3. 主な経費

概要のとおり、本学のアクティブラーニングにかかる先行研究の調査に用いた。

さらに、上記学会報告にかかる調査・研究のための費用に用いた。

また、必要な知見を得るための学術交流活動に用いた。

## 4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

2024 年度は、商経学部の経済学科長ということで、様々な会議などに参加させていただいた。また、学部再編にともなう新学部関連のさまざまなものに忙殺された。学部再編の議論もあり、その調整やそのやりとりで大きな時間が割かれた。会議のための会議、会議のための打合せなどがあり、研究時間を確保するという観点から、様々な困難に直面した。

それでも、お盆の休みを除いて、出勤状況を見ていただければわかるが、ほぼ週 6 日で様々な教育研究活動を行い、少しでも計画の履行を図ったが、当初計画していたテーマについての研究時間を十分に確保するに至らなかった。

(本文は 2 ページ以内にまとめること)